

43 乙女川の川狩り

禎瑞小学校  
文  
禎瑞公民館  
石井記念公園

44 嘉母神社  
45 手洗い水と秋祭り

46 補陀洛寺

53 (移設後)  
掛樋  
53 (移設前)

18 猪狩温泉

いしづちやま

11

- 9 宇賀神社
- 10 姥橋
- 11 ゆずりはさん
- 12 お天神さんの大楠
- 13 観音堂
- 14 吉祥寺藪と藤原城跡
- 15 お荒神さん
- 1 石鎚神社
- 2 木村屋
- 3 民部さん
- 4 西泉の経塚
- 5 一宮神社
- 6 大師寺
- 7 石樽千亦生家
- 8 阿弥陀寺
- 橋公民館

禎瑞小学校

## 1 石鎚神社

いわづちびこのかみ

古代、石鎚山の山頂に石土毘古神を祀ったことが伝えられている。修験道場の山として、神仏混合の石土蔵王大権現と称したが、えんのおづぬ役小角の開山以来、朝廷、諸将の崇敬が厚く、横峰寺、前神寺は別当社であった。

明治初年に石鎚神社と改め、後に別派特立の石鎚本教を設立した。とくりつ山頂の頂上社、中腹の成就社、西田の3社を総称して、石鎚神社と呼ぶ。

## 2 木村屋の石垣と土蔵

木村屋は近江の国出身の商人で、江戸時代初期から西条を代表する豪商として栄えた。屋号は近江屋。海や沼地に面して御影石を積み上げ、船着場を建設し、海に通じ、昭和初期まで栄えていた。

その後、豪邸も売却され、敷地には往時の土蔵を残すのみ。石垣と船着場に往古の面影を偲ぶことができる。船を繋ぐ金具がいくつも石垣に残っている。

## 3 民部さん

丹民部守清光は上浮穴郡久万郷笠松城の城主であったが、祖母が横山城主・近藤家の出身であったことから、秀吉の四国侵攻に対して、高峠城に籠城したといわれる。天正の陣では、西泉榎木に奮戦し、敵将吹上六郎と差し違えて討ち死にしたと伝えられる。

往還道に面したこの塚は、吃音や足の神様としてよく知られ、『西條誌』にも、絶えない線香や小さな鳥居の奉納などの記述がある。

## 4 西泉の経塚

ほうきょういんとう

宝篋印塔の壊れた笠や相輪のいくつかが残存して、経塚と一緒にになっている。年代的には江戸時代以降のもの、戦国時代や室町時代初期のものと思われる遺物が混在している。当地は真木一族の信仰の中心地であり、同族の祀りが毎年行われている。

## 5 一宮神社

古代より橘郷を代表する郷社で、大山祇神他一神を祀り、橘新宮神社と結びついていた。その後大山祇神は大三島に遷り、臍の緒の神のみを祀る村社となるが、その後は不明。

江戸時代の元和年中（1615年～1623年）に西泉新開が拓かれると、新宮神社と石岡神社の氏子争いや領域争いが起こっている。寛文10年（1670年）西条藩主の裁定で、昔の橘郷領域により、西泉村は氷見石岡神社の氏子と定まり争いは決着した。

元禄9年（1696年）建立の棟札むなふだが残っている。



石鎚神社



木村屋の石垣



民部さん



太師寺

## 6 大師寺

平安時代の初め、弘法大師が国外への持ち出しを禁止されていたインドの麦の種を、ふくらはぎを切り開いてその中に入れて持ち帰って広めたという言い伝えから、橘の人は「種播大師」と呼んでいる。大正末期、伊予西条西国三十三観音霊場が、真言宗の本寺、末寺、末庵から<sup>かんじょう</sup>勧進されて確立した時、当寺は第5番となった。

## 7 石樽千亦（いしくれちまた）と生家

明治時代、愛媛が生んだ「歌聖」といわれた。橘小学校校門前に生家がある。詠まれた和歌は約6万首。石鎚神社や石岡神社に歌碑が建てられている。

三男の茂氏は五島家に養子に入り、美代子夫人とともに、現在の天皇皇后両陛下の御作歌指導役として和歌の力量を発揮された。歌碑は、石鎚神社・一宮神社・武丈・東の川・ロープウェイの地などにある。

## 8 阿弥陀寺とノダフジ

本尊は阿弥陀如来、三間四方の一般的な御堂で、平安時代末期の創建と思われる。平成6年の建て替えの際、「吉祥寺末庵蓮花院阿弥陀如来堂再建」という嘉永5年（1852年）の棟札が見つかった。昭和30年頃以降は無住職となり、現在は前神寺の末庵となっている。

境内に「ノダフジ」の巨木があり、市の天然記念物に指定されている。藤棚の下に、天正の陣でこの地に戦死したといわれる今井玄蕃頭の祠がある。



阿弥陀寺のノダフジ

## 9 宇賀神社

「うが」は稲を食い荒らす害虫であり、宇賀の神は穀物の神で、特に稲を<sup>つかさど</sup>司る神として祀られている。西泉新開が拓かれてから、うちぬきや畦道の境などに小さな祠「う（お）がじんはん」という宇賀神社の分霊をお祀りしていた。この地には新たに榎木のお荒神さんが祀られるようになった。古代は橘新宮神社の西方の守護神・榎木大明神〔航海の神〕が祀られ、戦国時代には丹民部守の居住するところとなり、小早川勢の軍場ともなった。

## 10 姥橋（うばばし）の伝説

橘校区の榎木と野々市の往還道の境に姥橋という小さな橋がある。平安時代の初め、嵯峨天皇と檀林皇后の伝説を生んだ土地であり、さらには、古代に神野郡といわれた郡名が新居郡と改められた事実の伝承などが、『日本霊異記』や『文徳天皇実録』に記載されている。

現地には標柱も案内板もないが、江戸時代の橋標の折れたものが見つかり、市立博物館に保存されている。



宇賀神社

### 11 ゆずりはさん（住吉大明神）

橘新宮神社の北方の守護神・住吉大明神〔海の神〕が、禊瑞に近い北ノ庄と呼ばれる地に祀られていた。天文11年（1542年）の大水、高潮によって社が流されてしまったので、若水川の下流の「ゆずりは」の地に遷座された。現在、祠を覆うように樫の木が繁っている。

### 12 お天神さんの大楠

天満宮（お天神さん）は学問の神・菅原道真公を祀っている。現在は坂元・北山村の村社であり、かつては祭りや芝居なども盛んであった。村の中心地として、雨乞いのための「トンカカサン踊り」を行った記録なども残っている。

境内の楠の大木は県指定の天然記念物で、樹齢は千年前後。根回り17m、目通り10m、樹高25mで、枝張りは四方に20mを越し、その端正な樹形は県下一と称えられている。

### 13 観音堂

平安時代中期に建立され、地元の厚い信仰を受けてきたが、近年庵主もいなくなり、無住で廃屋同然となっていた。

現在の御堂は、坂元北山部落の人々の浄財によって平成元年に復元され、伊予西条西国三十三観音霊場第10番所となった。本尊は十一面観世音菩薩。

### 14 吉祥寺藪（きちじょうじやぶ）と藤原の城

坂元部落の南西に続く山の谷間にある竹藪で、かつてはここに63番札所吉祥寺の中心があった。

坂元という地名も、山上の寺から見て坂の下（元）の部落という意味からのものである。竹藪のある辺りだけでなく、山全体が寺域であり、30に及ぶ僧坊や御堂、祠などがあったといわれる。天正の陣の兵火により、氷見の現在の場所に遷り、昔日の面影はない。

この山を尾根伝いに登ると藤原の城跡に出る。『西条誌』の坂元村の項に、「当村の上に城跡といい伝うる山あり…この城を藤原の城といいしと 黒瀬山にては申せども、当村にては、しるものなし。…」という記述がある。

パイロット事業の開墾地の上の山で、地元では「ゴシデ山」と呼んでいる。城跡には石積の一部が残り、南と北の城跡への取り掛かりに空壕の跡も残っている。近くには橘村藤原氏の発祥の地といわれる「藤原の谷」がある。



ゆずりはさん



お天神さんの大楠



観音堂



千人塚



牛頭天王祠



猪狩温泉

## 15 お荒神さん

古来人間は火に対する畏れと感謝の気持ちを持ち、家の守護神として、また作物の神として信仰してきた。火の神、かまどの神を荒ぶる神として「お荒神さん」を祀ると同時に、お社日さんを祀って土地への祈りや収穫へのお礼参りをするようになった。西泉、檜木、野々市の各部落のお荒神さんのお祭りには、子供の奉納相撲があり、子供たちの健やかな成長をお願いしている。

## 16 千人塚

天正13年（1585年）、秀吉の四国侵攻の命を受けた安芸の毛利氏は、小早川隆景を総大将に3万余の軍勢で東予地方に攻め入った。新居、宇摩二郡の連合軍はわずかに3千人足らず。金子備後守を総大将として、高峠・高尾の両城に籠城して決戦となった。本格的な戦闘となって4日目に城は落ち、城外に討って出た将兵は野々市ヶ原一帯で白兵戦を繰り広げたが、ほぼ全滅した。戦いの後、小早川隆景は死体600余を首実検し、これを一墳に埋め、懇ろに葬ったといわれる。これが「千人塚」である。

## 17 地藏庵（浄光寺）と牛頭（ごず）天王祠

武蔵国に生まれた僧浄園が、享保11年（1726年）、江戸で松平氏から寄進を受け、浄光寺を建て地藏菩薩を造り、高野山で幾度も礼拝供養した。この地藏を塩出氏の祖先が江戸から背負って帰り、天正の陣で亡くなった人々を供養するため、野々市に浄光坊を建立し、奉納したといわれる。

道を隔ててやや西に牛頭天王祠がある。牛頭天王はインドの祇園精舎の守護神の牛頭神であり、頭上に牛の頭を持つ忿怒相で表されている。京都に始まる御霊会ごりょうえは疫病や怨霊を鎮めるために、須佐之男命すさのおのみことの強力な霊力を借りて封じ込めようとした。やがて牛頭天王と須佐之男命は同一人物の除疫神として祀られ、全国各地に広まった。夏越はらの祓いの行事はこの地方にも伝わり、野々市の祇園社の分社は石岡神社に祀られるようになって、以後石碑のみが残った。

## 18 猪狩温泉

含鉄弱食塩温泉で、泉温は16.1℃。岩盤が多く掘削に苦勞し、約60mの地下からポンプを利用して汲み上げている。淡橙色の汚濁があり、白いタオルを使うと赤黄色に染まってしまう。“こしけ”や皮膚病には特に良いとされる。古くは神功皇后が入浴されたと伝えられている。

平成17年から休業中だが、素晴らしい鉱泉湯の復活が待たれる。

## 19 高尾城と里城（さとじろ）

高尾城は本城高峠城の支城として、享禄3年（1530年）頃石川氏によって築かれた山城である。標高230mの険阻な山で、守りに適した眺望絶佳の城であった。天正の陣では籠城戦となったが、10分の1以下の兵力では衆寡敵せず、新戦術や数百挺の鉄砲隊に落城の憂き目となった。今は城跡への道標や看板もなければ、道もなくなっている。

また、高尾城の西尾根の北に伸びた末端にあった砦（出城）が、里城である。天正の陣では、高橋美濃守政輝がこの城を最後まで死守したが、落城したと伝えられる。今、砦跡に政輝の墓（慈光院殿大居士神儀）がある。その子孫である氷見組大庄屋高橋氏が花立、灯籠、供養塔を奉献し、墓を守っている。



岡林墓地

## 20 岡林墓地

氷見、橘、禎瑞にまたがる地区民の墓地で、約8haの丘全体に広がって約3万基の墓があり、盆、正月、彼岸には露天商の屋台が出て賑わう。

ここには真言宗の岡林寺こうりんがある。吉祥寺きちじょうじの末寺で、本尊の延命地藏と大きな閻魔大王坐像をお祀りしている。

中山川河口付近を干拓した日野新兵衛、西条藩槍術指南役の佐波兼明さば かねあき、明治時代にわが国初の栄養学を確立し食文化の改善に尽くした佐伯矩さあき ただすなど、著名な先人の墓が多くある。



工藤家

## 21 大黒屋工藤家、小寺家

石鎚信仰の旧道沿いにあり、大黒屋と呼ばれていた材木商の家で、土蔵には鍔絵こてえが描かれている。物資の集散地として栄えた氷見の歴史をよく伝えている。

工藤家からさらに南に上った街道沿いには小寺家があり、家の前に置かれた防火水槽にも「材木商」と刻まれており、往時の繁栄をうかがい知ることができる。

## 22 高尾神社

祭神は須佐之男命すさのおのみことと櫛名田比売命くしなだひめのみこと。氷見上之川部落に鎮座し、明治の初期には牛頭天王社と土地の人は呼んでいたのが、現在も天王さんと呼び親しまれている。例祭は4月28日、29日に行っている。

境内の南端は目もくらむような切り立った断崖となっており、下に切川が流れ、猪狩川に合流する。切川の名もここからきているといわれている。



小寺家



岡本ちょうちん店

### 23 岡本ちょうちん店

氷見の中心部下町にある。東予地方の秋祭りには数多くのだんじりやみこしがでる。その夜間運行は、1基あたり百余個のちょうちんで華麗に飾られる。また、家々の軒先に神様をお迎えするための御神燈が灯される。これら数多くのちょうちんは、そのほとんどを岡本さんが作っているといわれる。

### 24 芝井の泉

氷見小学校南門の東約150mのところであり、一年中涸れることなく清水が湧き出ている。湧水のところには大師堂が建立されており、弘法大師を祀っている。地域の人々は、「水大師さん」<sup>みずだいし</sup>「お加持水」「長寿水」などと親しみを込めて呼んでいる。



芝井の泉

### 25 覚法寺

浄土真宗歎喜山覚法寺、本尊は阿弥陀如来である。もとは野々市にあったが、天正の陣の戦火にあったため、慶長年間（1596年～1615年）に坂元城主石川織部正がこの地に移築したと伝えられる。

山門は小松藩一柳氏陣屋の通用門を移築したものである。境内の鐘撞堂は、昔、野々市にあったケヤキとクスの大木で建立したという。

### 26 十河信二先生の扁額

先生の直筆による書が氷見公民館2階ホールに掛けてある。『有法子』という座右の銘で、中国語。読みは「ユー ファー ズ」、意味は「方法はある。知恵を出して成せば、成る（何事も積極的に意欲を出せ）」。

昭和49年に氷見公民館が開設したときに、書いてくださった書ではないかと思われる。



十河信二先生の扁額

### 27 森邸

大富豪で、庄屋格の「住吉屋」。広大な日本家屋で、外から見ると屋根の重なりは見事。敷地が緩い勾配になっていることもあり、屋根を見上げるとその重なりが益々美しいものを感じる。表座敷、本玄関、御成門、庭園、豊便所、湯殿などの内部も往時の姿で維持されている。玄関前を流れる小水路も風情がある。森家は藩政期には二百石もの米を産した大地主で、藩から名字帯刀の庄屋格を受け、西条藩主や松山藩主も足を留めた家柄。



## 28 氷見高橋邸

江戸時代、氷見には背後の山から木材や薪炭、こうぞ、小豆等の山の産物が集まり、木材問屋が軒を連ね、呉服屋、履物屋、飲食店、旅籠、日用雑貨店などが建ち並び、大変繁栄した町であった。また、石鎚山のお山市ともなれば、海を渡って新兵衛へ上陸した登山者の列が町の通りを往き来していたといわれる。高橋家はその氷見組19か村を取り仕切る大庄屋であった。櫓のついた大屋根と妻入りの玄関の構えは見る人を圧倒させる迫力がある。広い屋敷の一角には、高橋家とともに成長を続けた銀杏の巨樹が高々とそびえ、「大喜多のいちょう」として有名。

## 29 林昌寺

日蓮宗円光山大乗院林昌寺、本尊は釈迦如来である。立派な八脚門の山門がある。現在は無住となり、妙昌寺の管理下にある。境内の墓地には、恵美須と大黒新田を開拓した氷見組大庄屋高橋与一左衛門や西条藩土馬場彦兵衛東圃の墓がある。西条藩主の尊崇を受け、境内に御霊屋を設けて位牌が祀られ、代参が行われていたといわれる。

## 30 吉祥（きちじょう）寺

真言宗密教山胎藏院吉祥寺といい、四国霊場63番札所で、本尊は毘沙門天。これを本尊とする寺は四国霊場中では当寺だけである。もとは坂元村の吉祥寺やぶにあったが、天正の陣の戦火に遭い現在地に移築した。

山門の扁額「密教山」は小松藩3代藩主なおあきら一柳直卿の筆によるものである。また、小松藩に輿入れした高鍋藩秋月家の息女の女駕籠が保存されている。

## 31 氷見盆野球大会

平成18年度で88回を数えた、自治会対抗の伝統的な野球大会である。毎年お盆の8月14日・15日に開催される。この大会のために帰省する人も多い。全国高校野球選手権大会（夏の甲子園）と同じ回数になっているが、始まったのはこちらが1年早い。（戦争での中断が1年多いため）第1回大会からの資料が公民館に残っている。

大正時代から住民の親睦を図る目的で続く、伝統的で、誇れる行事である。

## 32 石岡神社と秋祭り

祭神は菅田別命（＝応神天皇）、おきながたらしひめのみこと気長足姫命（＝神功皇后）、三女神を祀っており、氷見・橘地区の氏神さま。末長部落に鎮座している。神社の広大な社叢は市の天然記念物。

秋祭りは氷見・橘地区の氏子によって行われ、だんじり28台、みこし2台が奉納される。10月14日は自由行動。15日早朝から各々百余個の提灯に飾られただんじり、みこしが境内の桜の馬場に集まり、宮出し。その後統一行動で神輿にお供して氏子部落を巡る。夕刻、再び桜の馬場で一斉に豪快なかき比べを演じ、宮入りとなる。



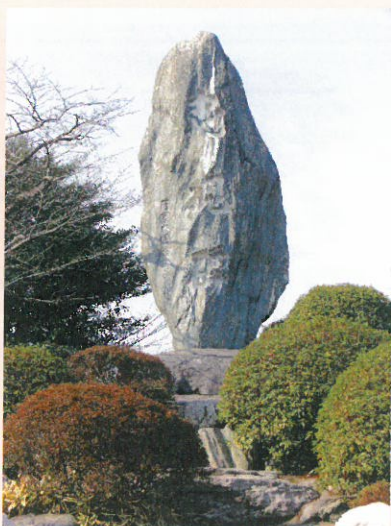
氷見高橋邸



吉祥寺



石岡神社



氷見の忠魂碑

### 33 氷見の忠魂碑

帝国在郷軍人会氷見分会員約50人を中心に、氷見町民延べ8,000人にも及ぶ勤労奉仕により、昭和3年の発起以来7年の歳月を費やして、昭和10年4月に完成した。

碑石は旧桜樹村（現西条市桜樹地区）から氷見石岡神社の桜の馬場までの24kmを、1日の運搬距離わずか150m前後、志川地区の幅3mの狭い林道や砂利道の旧県道にレールを敷設しながら、トロッコやジャッキ、カグラマキ機を使用して運搬した。特に木造の石根村大頭橋の通過には、碑石重量30tを耐えられるかどうか問題で、このための補強工事や様々な交通障害への対応等、その労苦は並大抵のものではなかったようである。

忠魂碑合祀数は、日清戦争3柱、日露戦争13柱、大東亜戦争187柱で、碑石は高さ4.7m、盛土円周47.7m、盛土高さ3.8m、重量約30tの立派なものであり、町民や氷見在住の石工3人の心がこもった忠魂碑である。

### 34 西大塚古墳



西大塚古墳

封土がなくなった半壊状態ではあるが、巨大な天井石やその石組みを直接見ることができる。羨道の奥行き1.2m、玄室の奥行きは5.8mあり、西条地方では最大級の横穴式古墳である。出土品は西条市郷土博物館に所蔵されている。

### 35 渡辺多兵衛の墓

渡辺多兵衛は延宝5年（1677年）頃氷見村に移住してきた豪農で、屋号を新開屋といった。天和から貞享（1681年～1688年）の頃、氷見蛭子地区の干拓事業を私財を投じて行った。

旧新兵衛橋を渡って中山川左岸の西方の水田の中に墓碑がある。碑面には「渡辺多兵衛勝次、貞享五戊辰八月十六日」と書かれている。中山川左岸堤防の多兵衛新開の入り口に、愛媛県知事久松定武の筆になる「多兵衛頌徳碑」が建っている。

### 36 干拓の大堤防



干拓の大堤防

海に突き出た禎瑞の北端に立つと、「よくもまあ、昔これだけのものを」と感嘆する。愛知県長良川下流にある「輪中」の集落に似ており、東西2.0km、南北2.7kmの楕円形で、取り囲む堤防の総延長は実に10kmに及ぶ。2kmの海岸線に8kmばかりの堤防を延ばして海面を取り囲み、約300町歩の新田を造成したのである。近世伊予国最大の新田であり、西条藩6代藩主・頼謙の命を受けた竹内立左衛門が心血をそそぎ、足かけ5年の歳月と延べ57万人の夫、2万両の巨費を投じて、天明2年（1782年）に完成した。

昔から人々は海面より低い0m地帯を意識し、万一に備えて堤防のふもとに集落を作り、土地のかさ上げと堤防の補強を忘れることはなかった。歴史的にみて重要な土木遺産である。

### 37 竜神社と禎瑞八景和歌

禎瑞新田の北端、鬼門を守る位置に竜神社が鎮座している。勧請は寛政11年（1799年）で、新田が完成して17年後のことである。主祭神は大綿津美神で大海を司る。配神は豊玉毘売神（山幸彦の夫人となる姫神）である。神社は乙女川に浮かぶように造られており、周りの高い松の木と合わせて絵のように美しい。ここから仰ぐ冬の石鎚山も見事である。

また、神社には「禎瑞竜神社八景和歌」という巻物が奉納されている。奉納者は「はしき子」、6代藩主・頼謙の奥方・於古代の方である。（「はしき子」は歌人としての名前。）禎瑞新田事業を命じた夫君・頼謙の遺徳を偲び、新田の美しさを八景に詠みこむ歌会を、文化14年（1817年）江戸で開いた。その折の彼女の歌8首が奉納されているが、水茎の跡は、今もなお、まことにうるわしい。

### 38 天災の教え・堤防決潰記念碑

竜神社の西方100m、堤防の裾に、乙女川に面して建っている。この辺りは禎瑞新田の中で、最も風浪が激しく打ち寄せる所であり、明治26年の暴風雨により、堅固を誇った堤防もこの場所で決潰した。碑文には「この所、明治26年10月14日、暴風雨のため荒波が起り、堤防が170mほど破れ、入りこんだ潮は家の軒まで浸し、田畑は深く波の底に沈み、実った稲穂も50日ほど潮の下になった。この場所は波が激しく打ち寄せる所であり、そのため、堤防は三重に折りたたんで造ってあったにもかかわらず、思いもかけず、このような災害となってしまった。天災は凶りがたいものであり、これからは夢ゆるがせにすべからず」というような内容が刻んである。

記念の碑を建て、後世の戒めとしたのである。

### 39 今も現役 南蛮樋の大石樋

神戸、橋、氷見、禎瑞地区の排水は、難波地区の遊水池に集まる。この膨大な水を潮の干満にあわせて（干潮の時に戸を開け、満潮の時に戸を閉める）、1日に2回排出する役目の樋門である。干拓完成のおり、当時としては珍しい最新の技術、輶輶仕掛け（ろくろで綱を巻き取る）の開閉装置を用いたことから、この樋門を南蛮樋と呼ぶようになった。このあたりの地名「難波」もこれによるものである。

南蛮樋は、大石、南南蛮、北南蛮、南小石、北小石と5ヶ所あったが、大石樋以外はその役目を終えている。大石樋は珍しく残った土木遺産であり、大切に保存したいものである。

### 40 干拓の原風景・水郷難波

伊予八藩の中でも、西条藩は最も多く、干拓という手段でその領地を増やしてきた。干拓事業では、海拔0mの田んぼや延々と続く大堤防に併せ、海に近い末端部の広い遊水池や遊水を外に排出する樋門等が造られ、また、新田の繁栄を祈って神社を勧請することが多かった。難波地区は、今なお、これらの風景を一望にとどめている貴重な集落である。

水に浮かんだような集落は“水の都ベニス”にも似て、水面に夕陽がキラキラと照りかえる夕暮れは、背後の石鎚山とともに、えもいえぬ美しさである。



竜神社



南蛮樋の大石樋



水郷難波



難波の藤の花

#### 41 難波の藤の花

昭和55年頃、古い南蛮樋がその用途を終えたため、湾曲した堤防の外側を埋めて平地を造る工事が行われた。

難波地区の自治会では、この広場にクロケータ場を作り、藤の木を植え、交流の場とした。丹精な世話が実り、藤は大きく枝を張り、最近では若々しい美しい花をいっぱいつけるようになった。噂を聞いて多くの人が訪れるようになり、婦人会ではうどんやおでんを提供することにした。



禎瑞の石鎚常夜灯

#### 42 石鎚常夜灯

石鎚信仰こうじゅうの講中は瀬戸内海の島々や山陽筋に多い。昔は、7月1日の「お山開き」には、ここにたくさんの舟を着け、お山をめざして歩きだした。その名残がこの常夜灯である。その頃は、西条の新堀港も新兵衛港も賑わったという。

#### 43 乙女川の川狩り

干拓工事でできた遊水池を利用して魚を飼う、しかし、その漁は平常は禁止し、年に数回、特定の日だけ藩命によって開放しようというのが御留川（乙女川）の川狩りである。

庶民は一番川、二番川などと呼んで楽しんだものである。昔はこれで秋祭りのご馳走を作ったので、東予一円から夜を徹して人々が集まり、数百隻の田舟と入り乱れる投網、威勢のよいジョウゴ、手玉で岸辺を探るニギリ、糸を垂れる太公望等たいこうぼう、魚場は大変な賑わいであった。樋門で沖が繋がっているため、海の魚、川の魚と種類も多く、その形も優れて大きかった。

しかし、近年はこの秋の風物詩への参加者が減少しており、さびしく残念に思われる。そんな中、禎瑞小学校の皆さんの活躍は頼もしい。



嘉母神社

#### 44 干拓の歴史を刻む嘉母（かも）神社

藩命を受けた竹内立左衛門は干拓事業の着手にあたり、加茂川下流の高洲たかす、現在の神社の位置に藩内祈願所六社の神主を招き、祠を建て、天神地祇ちぎを勧請し、工事の完成を祈願したのが始まりという。祭神は倉稲魂神うがのみたまのかみをはじめ穀物に関する神々であるが、後に竹内立左衛門命みことも合祀された。

境内には禎瑞新田の碑、石臼の碑、客土記念碑、楠木奉納記念碑、御神幸創始記念碑、歴代神職霊社の碑、石川梅蔵宮司の句碑など、禎瑞の歴史を刻むものがたくさんある。

また、別子銅山中興の祖といわれる広瀬宰平翁さいへいの茶室も移築されており、南天の床柱などを持つ建物として、歴史的にも、建築的にも価値が高い。

#### 45 嘉母神社の「手洗い水」と秋祭り

この社の「手洗い水」は西条を代表するうちぬきとして、「全国おいしい水大会」で二度も優勝した。神官の石川家ではこの水を使って焼酎「神錦」を醸造している。手洗い場の上には「西条打抜音頭」が掲げられ、ここ禎瑞が「打抜師の里」であることを教えてくれる。

また、ここの秋祭りは旧西条のトップを飾り、子ども太鼓台6台、体育の日の前前日に各部落をまわり、翌日宮出し、その後氏子部落内で「かきくらべ」。堤防を一回りして、夕刻神社への宮入となる。

#### 46 補陀洛寺(ふだらくじ)と“伊予の良寛さん”慈教(じきょう)法師

補陀洛寺は干拓事業着手の年(安永7年=1778年)、竹内立左衛門によって創建されたという。本尊は十一面観世音菩薩。昔はお寺というより墓を守る庵であり、「おあん」と呼ばれていた。したがって庵主もいたり、いなかったりであったという。

明治の初め、真道慈教という若いお坊さんが高野山からやって来て、爾来40年、全身全霊で村人のために尽くしてくれた。日本外史を暗唱し、和歌を詠み、慈悲の心に徹して生あるものをいつくしんだ。ノミ・シラミも殺さず、小鳥を呼び、刑を終えた無職の人には食を与えた。

一方で、石鎚山の麓・東の川まで木材を担ぎ出す「仲仕<sup>なかし</sup>」に出て、得たお金で寺を整備していったという。今も境内の至るところに「慈教建之」(慈教これを建てる)の文字が残っている。村人は“伊予の良寛さん”と呼んで、尊敬し、なついた。

#### 47 蛭子(えびす)神社と奉安殿

蛭子神社は、昭和32年、地元高丸の有志によって西宮神社(兵庫県)から勧請され、これまで自治会の手によって守られてきた。平成18年にも改修が行われたばかりである。

石造りの社はもと禎瑞小学校の奉安殿であったもので、扉の「菊の御紋章」は最近の改修で取り替えられ、別の所に飾られている。また、これと同様なものが補陀洛寺の墓地にもあり、神官石川家の御霊屋<sup>みたまや</sup>となっている。これは大町小学校の奉安殿であったものらしく、地区内に二つの奉安殿が活用されているのも珍しい。

#### 48 高丸集落の火の見櫓

都市部では各種通信網の整備により撤去、減少の傾向にある火の見櫓が高丸集落に残されている。干拓地らしく、集落内で最も高い所である堤防の上に立地しており、干拓地の全てを見渡せる。

#### 49 久米家の高石垣

高丸の久米家は、塀で取り囲んだ広い屋敷に大きな松、冠水対策としての高石垣の土蔵、堤防から下って入るアプローチなど、干拓地きっての旧家としてその歴史的価値を感じさせる。

また、分家である八幡の久米家も同様な備えがあり、風格あるたたずまいを見せている。



嘉母神社の手洗い水



高丸集落の火の見櫓



久米家の高石垣



石井記念公園

## 50 石井秋平氏の功績を称える記念公園

石井秋平氏は禎瑞高丸の出身。大阪に出てコンクリート工場の会社を興し、実業家として大成功を収めた。その浄財を地元の大阪市に<sup>きよきん</sup> 齎金するだけでなく、生まれ故郷の西条市や禎瑞等の教育基金や文化事業振興基金として差し出し、勲五等瑞宝章の荣誉に輝いた。記念公園は彼の功績を永く伝えるため、その基金をもとに造られたものである。

## 51 荒神社と戦艦三笠の砲弾

荒神社は中山川の流れの当てに、堤防の安全を祈って勧請された。祭神は素戔鳴命、昔から台所や火の神として有名である。

この境内に、日露戦役（明治37年～38年）のとき、連合艦隊の旗艦として活躍した戦艦「三笠」の砲弾が、郷土出身の鈴木秀次<sup>ひで</sup>海軍大佐によって奉納されている。題字「護国安民」も大佐の揮毫である。鈴木大佐は海軍兵学校を出たあと艦長などを歴任し、舞鶴軍港時代、画家荒木十畝<sup>じゅうぼ</sup>に学び、三畝と号した。退役の後、禎瑞下組に寓し風月を友としたが、その学識を慕い多くの人が入り出した。

## 52 黄金水と打抜師

堤防を締め切る工事、いわゆる「汐留」の翌年（天明元年＝1781年）、高丸地区で泉が湧き出し、天から<sup>しおどめ</sup> 嘉瑞（めでたいしるし）を賜ったとして喜び、「黄金水」と名付けたが、のちに藩公から「金泉」という名前を頂戴した。禎瑞（よろこばしいしるし）という地名もここからおこったと言われている（現在、この泉は涸れてしまっている）。

黄金水は自噴したものであるが、その後打ち抜き技術の発達とともに、禎瑞には多くの「うちぬき」が掘られ、飲み水や灌漑用に使われるようになった。『西條誌』の禎瑞の項には「打抜泉、およそ50ヶ所ばかり」とあり、これが伊予の「うちぬき」という語句の初見と思われる。

その後もこの地方ではたくさんの打抜師が活躍し、近辺はもちろん、遠く海を渡って山陽筋まで出向き「うちぬき」を掘った。禎瑞は打抜師たちの古里でもある。

## 53 新田への給水遺跡・掛樋（かけひ）

古来、干拓の成否は堤防の築立<sup>つきたて</sup>よりも、その後の給水にあるといわれてきた。竹内立左衛門はこれを遠く神戸村中西地区の泉に求め、末端まで延々6km近い水路を引いてきた。西禎瑞地区ではごく最近まで生活・農業用水としてこの水路を使用しており、その管理は厳格を極めていた。

この水路が立体交差で前神寺谷川（禎瑞に入って妹背川<sup>いもせ</sup>という）を渡る所が「掛樋」であり、天明2年（1782年）の完成以来、近年の妹背川の拡幅工事までの200年余りの間、地震や台風にも耐えて、その役目を果たしてきた。全国的にも珍しい近世土木遺産である。

その一部を現場に残し、また近くの公園にも展示し、新田の歴史を語る資料としている。



黄金水



掛樋